

正光寺開山四百年忌報恩記念事業だより

正光寺遠忌委員会広報誌 第12号 平成30年10月1日発行

追悼:大井際断^{おおいさいだん}老大師

平成30年2月27日午前2時57分、臨濟宗方広寺派管長大井際断^{せんげ}老師が遷化(死去)されました。大正4年2月26日のお誕生で、103歳になられたばかりでした。亡くなられる三日前まで高町の方広寺^{くわんどう}別院に出講され、僧侶や一般市民に提唱をされました。ここにご生前に賜った深いご薫陶に感謝申し上げるとともに、方広寺派内はもとより禅界でのご功績を讃え、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

大井際断^{おおいさいだん}老大師略歴

大正4年(1915)兵庫県西宮市東福寺派茂松寺に生まれる。京都大学文学部哲学科を卒業後、昭和15年(1940)に京都東福僧堂に入門。第二次世界大戦兵役従軍。昭和23年(1948)茂松寺住職。再び東福僧堂の家永老師に参禅、法を嗣ぐ。昭和35年(1960)から15年間、大分の妙心寺派萬壽寺僧堂で雲水指導。その後15年間、妙心寺山内の東海庵住職および花園大学教授となり、国内外の禅指導をされる。平成2年(1990)に方広寺派管長・方広僧堂師家に就任。その後も国内はもとよりヨーロッパ各地を巡教し、長きにわたり方広寺派の発展に尽力された。



歓迎:安永^{やすなが}祖堂^{そどう}老大師

大井際断前管長様の後任に、全臨濟宗14派の中から新しい管長様が選ばれ、4月1日付けで就任されましたので、ご紹介致します。

安永^{やすなが}祖堂^{そどう}老大師略歴

昭和31年(1956)3月愛媛県生まれ。花園大学を卒業後、臨濟宗天龍寺派天龍寺専門道場^{もと}に入門し、天龍寺派前管長平田精耕老師の下で15年間参禅修行。大阪市池田の天龍寺派松雲寺住職を務めながら、天龍寺国際禅堂師家ならびに花園大学文学部仏教学科教授を17年間勤められ、傍らで慶応・立教・同志社各大学などへも出講。本年4月より臨濟宗方広寺派管長兼僧堂師家に就任。主な著書に『私が生きて・掴んで・実践したもの』(共著・宗教心理出版)、『現代語訳碧巖録』(四季社)、『禅ぜん ZEN』(禅文化研究所)、『一から始める禅』(監修・ダイヤモンド出版)、『笑う禅僧』(講談社現代新書)ほか多数。



師は行^{ぎょう}(修行)・学(学問)ともに極められた逸材で、特に言葉を大切にされるため学生や一般市民はもとより、青年僧や外国人からも講義評価はきわめて高いと言われています。と同時に師は、言葉以上に禅の実践体験の重要性を痛徹されているため、今後の修行者指導にも大いに期待されています。

特集 終活(しゅうかつ)

「終活」という言葉が頻繁に聞かれるようになってから久しいのですが、大切な事でもあり正光寺としても提案できることがいくつかありますので、ご紹介します。

社会的背景

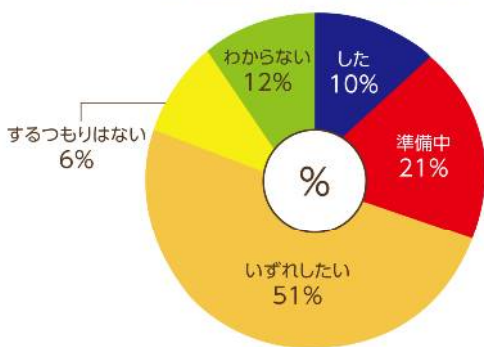
日本の総人口は第二次世界大戦後から増え続け、高度経済成長を支えてきましたが、2010年をピークに減り始めました。これは出生率の低下(少子化)によるもので、平均寿命の延びに伴い高齢者(65歳以上)人口はそれ以降も増え続けています。内閣府のデータによれば、終戦直後は5%程度であった総人口に占める高齢者の割合は漸次増加し、2035年頃には日本の人口の

約3の1を占めるようになると予測されるそうです。日本の社会は急速に少子高齢化が進み、近い将来、団塊の世代が大挙して介護を受け、そしていずれ鬼籍に入ります。10人近い子たくさんな昭和初期ならば親の老後の世話や故人の後始末を分担して行うことができましたし、地域社会での人間関係も濃厚でした。現代のように子供1人または子供がいない夫婦や、未婚者が珍しくない時代には、次世代や親戚縁者、地域社会へ負担はかけられないので高齢者の間では、周囲に迷惑をかけずに人生を終わるための準備をする必要性が増し、社会現象として“終活”が広がってきたと言えます。

年齢区分別将来人口推計

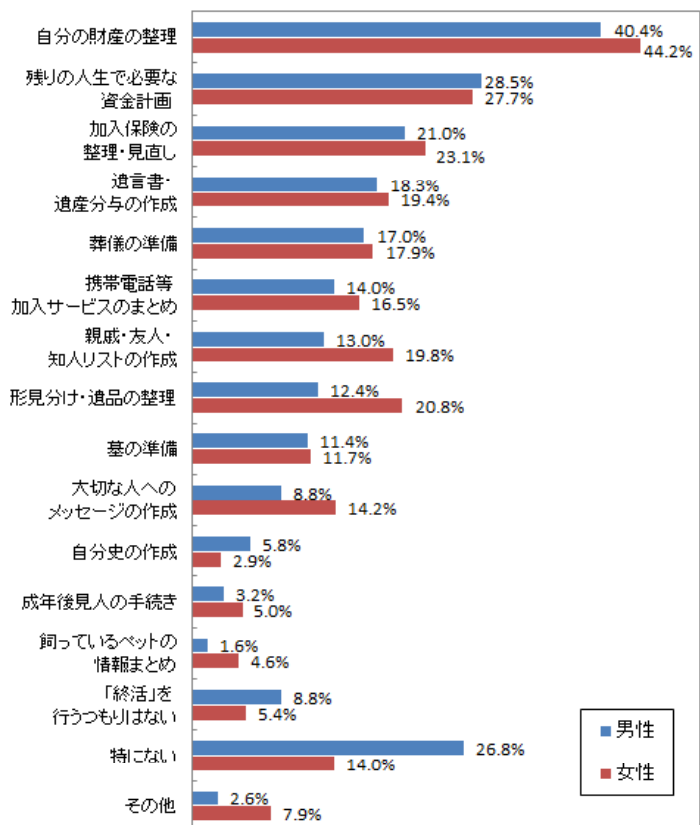


終活についてあなたは?



(出所)日経生活モニター

終活とは...右のグラフで終活の内容や目的が理解できますが、若い人たちが夢多き未来に描く人生設計とは異なり、完成した作品をさらにひと手間加えたり、余分なものをそぎ落としたりしながら醸成させるようなものかも知れません。ですから、それが可能なうちにできるということは意外にも幸せなことと言えるでしょう。



「終活の目的はおもに何ですか？」

エンディングノートとは

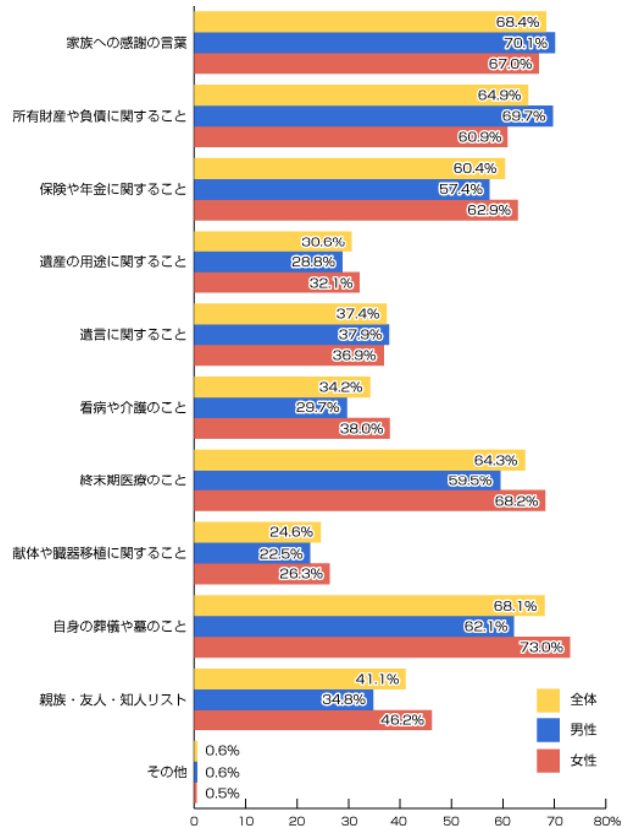
終活ノートとも呼ばれますが、「自分史」であったり「どう生きべきか」や「最期をどう迎えるか」「死後も安らかに」などをじっくりと見つめ、文字に表すものです。では遺言書とはどう違うのでしょうか。

◆遺言書（ゆいごんしょ）

自分に万一のことがあった場合に財産（遺産）を誰にどれだけ渡すか、事業や不動産などの管理を誰に託すかを生前に取り決めた意思表示を、民法の規定に従って書面に残したものです。遺言書の内容は、原則として法律で定められた相続の規定よりも優先されるなど、法的効力があるため、相続をスムーズかつトラブルを防止するために作成されることが多いようです。

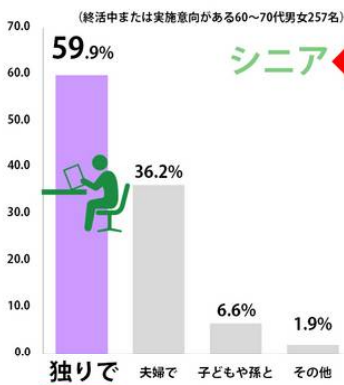
◆エンディングノート（終活ノート）

遺言書がおもに「死後の財産分与」だとすると、エンディングノートは「人生の記録と整理」といえるでしょう。遺言書のように法的効力はありませんし、遺書のような死に特化した内容である必要もありません。また、病気によって死期が迫っている場合のみならず、“いつか訪れる死”に対して書かれることが多いようです。前ページの「終活の目的グラフ」や、上記の「ノートに書き残したいことグラフ」の内容を一冊のノートにまとめられるのがエンディングノートです。そして人生全体を振り返ることにより、残された人生をよりよく生きることに意味があることに気付けるのです。

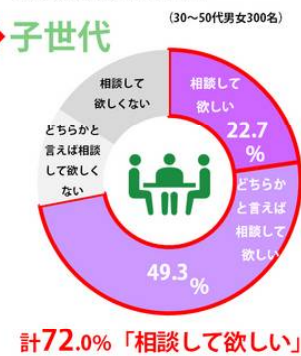


「エンディングノートに書き残したいことは？」

誰と終活していますか(したいですか)?



親が生前墓を建てるとしたら、相談して欲しいですか？



終活は…自分の死後に子供たちへ迷惑がかからぬようにと死の準備をするところから始まったのですが、左のグラフでは左側のシニア（老世代）と右側の子世代とは感覚に差が見られます。迷惑をかけないようにと気遣う老世代に対して子世代は迷惑とは考えず、共有したいと願っているのです。ですから終活も大切ですが本来ならば、普段から子世代ともよく人生

を語り合い、老いや病、死をも示し、ともに見つめることが「いのちの伝承」というとても尊厳な教育になるはずです。

『正光寺オリジナルエンディングノート』プレゼント

とりあえず書きはじめてみましょう。そうは言っても簡単にはムリ…。そんな時は古いアルバムを眺めたり、誰かに自分の昔話を語るのも良いでしょう。どこからでもいいから書けるところから書いてみましょう。書き直しもOKですし、ご家族分何冊でも差し上げます。書き上がったら家族と共有も良し、時折こっそり見直すも良し、正光寺に預けるといいのも良いかも知れませんね。

終活での不安を解決しましょう

終活をする際に分かりにくいことの代表に葬儀のことでと墓地のことがあるようです。昔であれば何の準備も必要とせずに、当然の如く喪主が決まり、隣保の協力を頂きながら粛々と進行していったものです。ところが、「きずな」という言葉が感銘を誘うくらいに人と人、家と家のつながりが希薄化した昨今では「家族葬」が主流となったと言わざるを得ません。故人への追悼と感謝こそが葬送の中心に置かれるべきで、残った者の都合を最優先するのめいかがかと思われます。そこで、略さざるを得ない部分と尊厳との間でどのような選択肢があるのかを一緒に考えてみましょう。

①自宅葬（自宅で通夜から葬儀までを行う）

一時期、ほとんど皆無かいむとなりましたが、施主の負担を軽減する葬祭業者サービスの向上により、最近また見直されてきたようです。病院や施設で亡くなられる事が多い時代ですので、住み慣れた家に帰りた、または帰してあげたいの想いは強いものです。また施主の希望に沿った時間配分にも余裕があり、しみじみと最期のお別れが出来ることも自宅葬が再び選ばれ始めたのでしょう。



【自宅葬の一例】

メリット：我が家から旅立てる。時間に余裕が持てる。近隣の方々が弔問しやすいなど

デメリット：家の片付けが大変。駐車場の確保が難しい。近隣の方々への気遣いなど

*デメリットを克服するためにコンパクトな家族葬にしたり、通夜までを自宅で行うケースも多く見られます。

②ホール葬（遺体搬入から通夜、葬儀、三日目までホールで行う）



【ホール葬の一例】

病院や施設から、または自宅から直接葬祭ホールへ移動し、通夜から葬儀、精進落としまで一切を行なうケースで、現在最も多く行われている葬祭法です。空調や設備、動線など利便性が高く、遺族や参列者に負担が少ないことが選ばれる理由と言えます。

メリット：家の片付けや駐車場の不安なし。厳寒酷暑期も安心。

デメリット：①の自宅葬のメリットが実現できない。経費が掛かるなど

*デメリットを克服するためにコンパクトな家族葬にしたり、通夜までを自宅で行うケースも多くみられます。

③寺葬（正光寺の本堂や書院を利用して行う葬儀）

基本的には自宅で通夜を行うことを推奨していますので、翌日に本堂に移棺して葬儀を行い、山門から出棺し火葬場へ向かいます（浜松斎場または浜北斎場）。収骨後本堂に戻り三日目法要、書院で精進落としを行いません。葬儀の規模や事情によりお通夜から本堂で行う場合もありますが、ご遺体はお寺で



【正光寺本堂葬儀の一例】

お預かり致しますので、ご遺族は安心してご自宅で休んで頂けます。

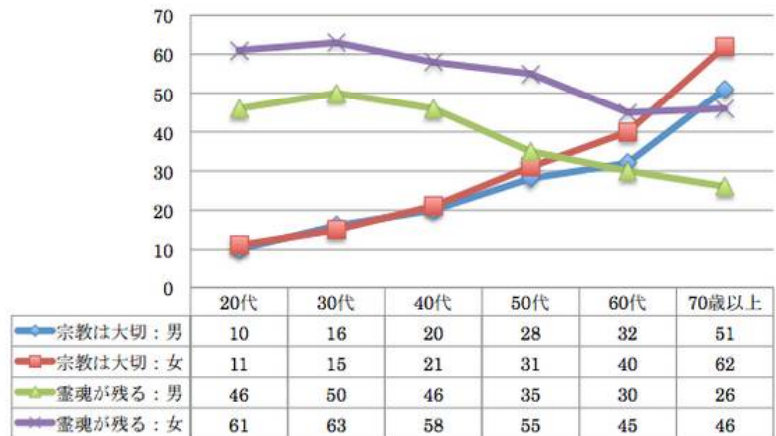
メリット：祭壇は不要。ご本尊様の前で行える。駐車場の不安なし。最も安価など

デメリット：寺の行事と重なる場合に融通を要す。厳寒酷暑期は利用しづらいなど

自宅葬もホール葬も寺葬もいずれの場合もメリット・デメリットはあるのでよく比較して相応しい葬法をお選び頂くことをお勧めします。そしてどの方法を選ばれても、葬祭業者は親切に応じてくれますから遠慮なさらずにご希望を伝えるべきでしょう。また、葬祭業者にも得手・不得手もあります。ホール葬に特化していたり、自宅葬や寺葬に特化している業者など様々ですので、不明な場合にはお寺をご紹介します。

◆昭和葬と平成葬と次代葬

昭和の時代には自宅葬が圧倒的に多く行なわれ、参列者も親戚縁者や友人をはじめ地域住民、職場関係と数百人単位で大勢が見送りに参列したものです。それは協力し合わなければ生きられない時代の中で生まれた相互扶助の知恵だったのかも知れません。その後生活水準も向上し、個の時代とも呼ばれる平成に入ると様々な主義主張を認め合うようにもなり、個性が尊重されるようになってきました。葬儀の方法も住宅事情や経済性、少子高齢化も影響した価値観の相違からホール葬、家族葬、地味葬、直葬、無宗教葬などなど多様化してきたのでした。さて、**次の時代**にはどうなっていくのでしょうか。もっともっと簡易的になり生ゴミ処理化していくのか、相互扶助が見直されたり、宗教回帰していくのか…。下のグラフにあるように、世代により死生観に差異がみられることは興味深いところです。ただ、葬儀は故人への感謝と称賛、靈魂の鎮化と浄化、来世への期待など、祭祀者・遺族・参列者・世代などそれぞれの立場で様々に込められるものですので、規模の大小はともかく略せない、略してはならない部分に今一度眼を向けてお考え頂きたいと願います。



年代別の宗教観と死後の世界観

永代供養のおはなし

本堂・位牌堂・書院が完成した以降、永代供養のお申込みが増えてきました。本誌8号（平成28年10月発行）に永代供養のことや納骨堂のご紹介をしたのですが、確認の意味で正光寺の永代供養の概略を再編して掲載致します。

永代供養とは…新規にお墓を建てても供養してもらえない場合や、代々継承された墓地でも、継承親族がいなくなる場合などにやむを得ず寺院や霊園などに年忌供養の代行を依頼することをさします。つまり、本来は遺族親族が行うべき供養ですので、代行というわけです。核家族化や少子化、都市部への人口流出など人々の生活スタイルが変化した昨今、個人のお墓を持つ以外の手段として永代供養が選ばれることが増えてきました。

納骨堂(地藏堂)…正光寺の本堂再建計画では、世間の要望にこたえるべく納骨堂が位牌堂のとなりに新設されました。杉の香りのロッカー形式の納骨壇にはそれぞれ二体ずつ納骨ができ、33回忌まで安骨されます。その後は墓地入り口にある萬霊供養塔にご遺骨を移し合葬され、永代にわたって供養されます。これにより、理想的な永代供養の形が調ったといえます。



納骨堂内部と六地藏

◆**永代供養の実際**◆ 永代供養は寺院によって十三回忌まで、三十三回忌までなど様々ですが、正光寺の場合は諸回忌（一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌）には責任をもってご供養を行ないます。またそのような年忌供養以外にも彼岸供養、7月15日の山門施餓鬼でのご供養はもちろんのこと、毎月命日には一般檀信徒の先祖供養と同様にご供養しております。また地藏堂内にも個別のお位牌を安置してご供養致しますので、ご縁者の方がいらっしゃる場合には、いつでもお参り頂くことができます。



萬霊供養塔のお地藏さま

◆**永代供養料**◆ 基本的な考え方は納骨堂権利金（旧来墓地からの転葬の場合は不要）と33回忌までの年忌回数×戒名位に応じた供養料（布施）などとなりますが、永代供養を希望される場合は、事情も心情もさまざまですので、一概に価格を定めることがふさわしいとは言えないのが現状です。ですから直接正光寺へ状況や想いを伝えて頂きますようお願いしています。また『永代供養の手引き』も準備していますので、いつでもお気軽にご相談ください。

◆ご理解頂きたいこと◆

- ①永代供養を申し込まれる以前の宗教や宗派は問いませんが、それ以降は正光寺での葬儀や供養の仕方は、臨済宗方広寺派の法式で行なわせて頂くこと
- ②供養できる立場の方がいる場合は、可能な限り通常のご供養をして頂くこと
- ③あらかじめご説明しますが、宗教法人正光寺の諸規約を遵守して頂くこと …以上をお願いしています。



墓じまいのこと

「家＝墓」の存続は極めて困難な時代に入ったと言えます。以前、NHKのクローズアップ現代でも『急増する「墓じまい」新たな弔いの形とは』が大きな反響を呼びました。正光寺でも墓じまいは今後増えることが予想されます。墓地の継承者がいなくなるというケースですが、その際の注意すべき点をいくつか挙げておきます。

イ.親族間で十分に話し合っておく

これも終活なのですが、継承者以外の縁者にとっても大切な墓地ですので、話し合いをして理解を深めておくことは大事なことです。

ロ.住職に相談する

状況は多様化していますので、お寺としても柔軟に幅広く対応しています。どうしてもよいか悩む前に先ずはご相談ください。また改葬許可証などが必要な場合がありますので、手続きなどのご説明も致します。

ハ.早い目に依頼する

墓じまいも業者さんに委託しますので経費が掛かります。数件がまとまって行えば割安となりますので、早めにお寺に依頼して下さい。

終活の総括^{そうかつ}

少子高齢化時代に入り、「若い者には迷惑をかけたくない」の思いから終活が始まりましたが、ここで原点に戻って身近な人の死や葬儀にはどんな意味があるのかを見直す必要があると思います。5ページにも書きましたが、遺族にとって葬儀は故人への称賛や感謝、慰霊であるべきです。ですから葬儀には故人の生きざまや家族関係が反映されています。そのために心がけるべき大切なこととは…

◆日頃から死を覚悟して腹を据え、一日一日を大切に生きること。

◆親も子も相互に高め合い、認め合いながら暮らすこと。

これらがあれば「老・病・死」への不安も軽減し、安心して次世代や縁者に最期をゆ

だねられるはず。そして、最後まで自分らしく生きるためには、死から目を背けず、限りある時間をより充実させて過ごすことが重要なのです。

このように他人に迷惑をかけないための終活であっても、自分にとっても人生を客観的に総括し、残された人生をよりよく生きる意味があることに気付けるはず。



檀家さんの声をお寄せいただきました

東区豊町

藤田 直人

和尚様いつも家族共々お世話になっております。特に今年は暑い中お越しいただき、ありがとうございます。最近も暑い日と肌寒い日が交互にやってきて、体調を崩す人が周りにも増えていますので、お気を付けてください。

さて、正光寺といえば、夏休みの坐禅会。坐禅をして、ラジオ体操をして、家に帰って朝ごはんを食べる。それが私の中の最も古い正光寺の思い出です。正光寺へ誰よりも早く行く。それが使命のように朝早く家を出ていた、と母は当時の私の様子を教えてくださいました。

確かに私の中にある正光寺への道のりは薄暗く、鳥のホーホーと鳴く声が響いていました。その声の主はいったいどんな鳥だろうと考えながら歩き、正光寺へ早足で向かっていたと思います。なぜ早く行っていたかということ、私は誰もいない正光寺にすることが好きだったからです。

特に好きだったのは雨の日の正光寺です。現在きれいなお庭になっている本堂正面の縁側に座り、雨が葉を打つ音、吹きぬけるひやりとする風、湿った木とお線香の香り。それらを朝一番に来て、独り占めしていました。

私は今、ざわめく職場の昼休みにこの文を執筆しています。空調も効かず、様々なお弁当のおいが混ざりお世辞にもいいにおいとは言えません。当時の私はなんて贅沢な時間を過ごしていたのでしょうか。正直うらやましいです。

あの時のように落ち着ける場所を見つけて無理のない日々を送っていきたいです。

東区

匿名子

3年前に正光寺様の本堂やお位牌堂、書院などが立派に完成され、一檀家としてとてもうれしく、誇らしく感じています。ご住職様始め、役員の皆様方のご労苦を考えますと、本当に有難いことと感謝申し上げます。

さて、正光寺様は先代の恵澄和尚様の時代から大変お世話になっていますが、いつもお墓参りに伺っても境内はきれいにほうき目が立ち、いつも心が浄められるそんな自慢のお寺です。禅宗のお寺様もあちこちとお参りに出かけましたが、お掃除のころを語らずともお示し下さっているのが正光寺様です。そして現住職の正澄和尚様も先代和尚様そっくりのお掃除や植木のお手入れで、境内に入ると別世界の落ち着きを感じられます。また、先代の奥様は多くは語られませんが、いつも心が癒される微笑みを頂戴して山門をくぐって帰ったものです。そして数年前に深刻な悩みを抱えたままお寺にお参りに出かけた時に奥様は、泣きながらひとしきり打ち明ける私の話を静かに聴いて下さって、一言二言のご助言を頂き、気持ちですっかりと楽になったことは一生忘れられません。そんな奥様や和尚様も副住職様と若奥様という心強いサポートを得て、さらにはお孫様にも恵まれて、微笑ましくも安心してお参りさせて頂いているのは私だけではないと思います。このように正光寺が代々バトンタッチされていくことは、檀家にとってもご先祖様方にとってもこの上ない安心となっていくことと思います。これからも宜しくお願い致します。匿名の我がままをお許してください。

編集後記

方広寺の大井管長様は103歳で亡くなられる寸前まで仕事をされ、まさに大往生でした。私たちの理想とするお手本のような終末だったと言えます。今号は「終活」がテーマでしたが、自分の最期のゴールを自分で設計することはとても意義深いことだと思います。その部分でも、これからさまざまなお智慧を頂戴できる新しい管長様もお見えになったことはとても喜ばしいことですし、お話を親しく聞けるようなチャンスを多く持ちたいものです。

◇発行：〒431-3101 浜松市東区豊町749 金光山 正光寺
TEL (053) 434-0800 FAX (053) 443-7410
正光寺ホームページ <http://shokoji.info>
◇編集：「正光寺開山400年忌報恩記念事業実行委員会」総務部会